ZOCALO 2021 6 ▸ 7

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

ボイス＋パレルモ

2021年7月10日（土）～ 9月5日（日）

ブリンキー・パレルモ《無題》1976 - 77年　個人蔵（撮影：木奥惠三）
© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2021 E4203

ヨーゼフ・ボイスとブリンキー・パレルモ。今年が生誕100年の記念すべき年にあたり、「社会彫塑」や「人は誰もが芸術家である」といった言葉を残してひろく影響を与えたボイスに対して、パレルモの日本での知名度は決して高いとはいえません。実質的な活動期間は15年に満たず、残された作品も多くないパレルモの制作を国内ではじめて本格的に紹介すること。そして、ボイスをして「自身に最も近い表現者だった」と言わしめたパレルモの繊細な作品を傍らに置くことで、日本でもよく知られたボイス像を揺さぶり更新することがこの展覧会のテーマです。

1960年代から立体的な「オブジェクト」や既製品の布を縫い合わせた「布絵画」などの制作をとおして、カンヴァスや木枠といった絵画の構成要素自体を問い直す作品を手掛けたパレルモは、最後の数年間、薄いアルミニウムの板にアクリル絵具を塗り重ね、それを複数枚組み合わせる「金属絵画」に集中的に取り組みました。そのうちの1点をドイツのギャラリーが所蔵していることを知り、一昨年の秋、調査と出品交渉のためメンヒェングラードバッハに赴きました。

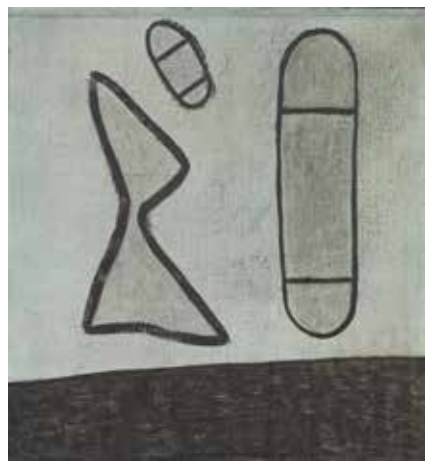
メンヒェングラードバッハは、デュッセルドルフの芸術アカデミーを修了したパレルモが20代後半の数年間居を構えていた場所で、彼の美術館での初個展（1973年）もこの地の市立美術館で開催されています。（パレルモの個展の6年前には、同じ場所でボイスも初の回顧展を開催しています。）

作品は、パレルモがモルディブで客死したあとのアトリエに残されていた作品のひとつで、8枚組の金属絵画でした。A4サイズほどのアルミニウムのパネルがレモンイエローに塗られており、そのうちの4枚には鮮やかな緑色のストロークが施されています。サインこそ入れられていないものの、パネルの順序を示すⅠ～Ⅷの番号と天地を指示する矢印が作家の手によって裏面に記されていました。

この作品が完成作なのか、それとも右側の4枚のパネルにも手が加えられるはずだったのか、確かめるすべはありません。しかし、イエローの連続のうちに、背後の色を透過させるようなかすれたストロークが即興的に現れては消える様子は、ボイスがパレルモを評したことば、「彼の絵画をもっと息のように見なくてはなりません。やって来て、行ってしまう」を直接思い起こさせます。

パレルモはモルディブに出発する直前に、双子の弟に電話をかけ、この8枚組の作品について熱心に語ったといいます。金属面の軽やかな筆致によって自分自身を再定義できた、ある種の自己解放を感じることができたのだ、と。

この作品を展覧会のエピローグに加え、海外作品の輸送計画が大詰めに入った時期に、同じギャラリーから、パレルモの初期の油彩を貸し出すことができそうだとの連絡を受けました。急遽展覧会に加えることとなった《男と女》は、パレルモがアカデミーのボイスのクラスに移る前、シュルレアリスム的な絵画を制作していた時期の作品です。弟の結婚祝いとして送られた本作は、作品をしばしば身近な人に捧げたパレルモらしく、またその後の「オブジェクト」の有機的なかたちの原点を想像させます。また、カンヴァスを貼りつけたパネルに木枠を取りつけるための釘がことごとく途中で曲がっているのは、「布絵画」の制作の際2枚の布をまっすぐに縫い合わせることができなかったというパレルモの不器用さが表れているようで、ほほえましくもあります。



ブリンキー・パレルモ《男と女》1963年　個人蔵
© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2021 E4203

さて、この展覧会はコロナ禍による臨時休館やスケジュール変更により、当初の予定から約半年遅れでの開催となりましたが、延期前の計画をほとんど変更することなく実現できたのは、国内外の各所蔵者の理解と支えによるものです。ボイスの代表作のひとつ《ユーラシアの杖》を日本に招来できたことや、パレルモの画業の「始まり」と「終わり」にあたる上述の2作品を含め、その制作を大規模に通観できることはまたとない機会です。ぜひお見逃しなく。

（O.I.）

さくねんのたまもの　2020年度新収蔵品のご紹介

2020年度は寄贈による新収蔵品30点、そして寄託作品11点がコレクションに加わりました。

寄贈された新収蔵品の多くは、埼玉県ゆかりの画家たちの作品です。加須市出身の画家・斎藤与里（1885-1959）は、1906年に渡仏し、ポスト印象派をはじめとする同時代の美術を旺盛に吸収します。フランス滞在中に制作したと思われる水彩画のほか、画風を確立させていく過渡期にあたる1930年代から40年代にかけて制作された油彩画など、あわせて23点の寄贈を受けました。これらはいずれも斎藤の作品変遷を辿るうえで欠かせない貴重な作例です。

熊谷市出身の森田恒友（1881-1933）の作品も、新たに3点加わりました。森田は洋画家として画業をスタートさせますが、約1年間の滞欧を経て、日本各地を旅するなかで、水墨による表現を洗練させていきます。当館では、すでに森田の日本画を55点収蔵していますが、昨年度寄贈された3点は団扇に描かれており、森田の画業のなかでも希少な作例といえます。

また、埼玉県初の洋画団体「坂東洋画会」を結成し、須田剋太や里見明正ら県内の後進の育成に貢献した大久保喜一（1885-1948）の作品も寄贈されました。東京美術学校で黒田清輝、和田英作らに師事し、堅実な写実表現によってその評価を確立した大久保の、晩年の1点です。

当館で開催した展覧会をきっかけに、寄贈を受けた作品もあります。そのうちのひとつが、2020年に当館で開催した「上田薫展」の出品作《コップの水J》です。上田薫（1928-）は、写真のイメージをカンヴァスに投影して描く技法で知られていますが、本作は《コップの水J》（水戸芸術館所管）をもとにリトグラフで制作されたものです。

2019年に「アーティスト・プロジェクト#2.04 トモトシ 有酸素ナンパ」を開催したトモトシ（1983-）からは、映像作品2点が寄贈されました。当館にとっては、初めての映像作品のコレクションです。《グレイトイベント》は、「東京2020オリンピック」のユニフォームを着た作家自身が、埼玉から新国立競技場へと棒高跳のポールを運ぶ様子を記録した作品です。コロナ禍以前の「オリンピックを待つ都市」の姿を捉えた本作は、図らずも、制作当初とは異なる問いを私たちに投げかけています。

さらに、代表作《読書する男》を含む須田剋太（1906-1990）の油彩画・ドローイング計5点、県内にアトリエを構えた画家・和田賢一（1956-2008）の《ATOM 04-36 B.G.P.》、2020年度の企画展「New Photographic Objects：写真と映像の物質性」で紹介したアーティストデュオ、Nerholの平面作品2点、そして丸沼芸術の森より、フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）の水彩画1点、アルフレッド・シスレー（1839-1899）、マルク・シャガール（1887-1985）の油彩画それぞれ1点と、昨年度は多彩な作品が寄託されました。制作された時代も地域も異なる作品群は、当館のコレクションに新たな視点を与えてくれることでしょう。

収蔵品の購入予算の確保が難しい状況が続くなかで、コレクションの拡充は、当館にとって切実な課題のひとつです。貴重な作品をご寄贈・ご寄託いただきました皆様に改めて御礼申し上げます。また、今回ご紹介した作品の多くは、「MOMASコレクション第1期　さいきんのたまもの」（～7月11日）に出品中です。MOMASコレクションに新たに仲間入りした作品を、ぜひ展示室でご覧ください。

（S.S.）

1

2

3

1　斎藤与里《支那服の少女》1940年　唐澤章氏寄贈
2　上田薫《コップの水J》1986年　株式会社名古屋画廊 代表取締役 中山真一氏寄贈
3　トモトシ《グレイトイベント》2019年